

2020 年度事業報告

(2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日)

I 事業概要

日本 WHO 協会は新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的流行）の影響を直接に受けることになった。緊急事態宣言や海外渡航制限により、日本 WHO 協会が実施予定であった海外でのプロジェクトや多くのセミナーやシンポジウムが延期あるいはオンライン実施を余儀なくされた。また、新型コロナウイルス感染症に対する WHO 本部の初期対応の遅れや中国寄りの姿勢に対する批判などを受け、日本 WHO 協会にも抗議のメールや電話が相次いだ。一方、日本 WHO 協会のホームページの閲覧数は急増し、市井の方からの善意の寄付金が届くようにもなった。WHO に対するさまざまな批判はあったものの、WHO が大きなニュースになった 1 年であった。新型コロナウイルス感染症が教えてくれたことは、健康に過ごすことのできるいのちの大切さ（ウェル・ビーイング）とともに、国内では保健医療行政におけるデジタル化の遅れであり、国際的には自国だけで感染症対策は完結しないなかでの国際協調の重要性であった。

以下に、定款第 4 条（事業）に準拠してその概要を報告する。

1. 啓発事業

(WHO 憲章精神の普及及び健康に関するフォーラム等の開催並びに機関誌広報等の啓発事業)

① ウェブサイトの拡充とメールマガジン発信

6 月 1 日にホームページの全面リニューアルを行い、コンテンツやデザインを見直し、ユーザビリティの向上を図り、組織基本情報、WHO 憲章や組織に関する情報、機関誌内容等を公開、適宜更新するとともに、WHO から発信される情報等を逐次掲載し、広報発信を行った。

- 1) ニュースを **298** 件（前年度は 235 件）発信した。
- 2) メールマガジンを **13** 回（195 号～207 号）発行した。配信先数は前年度に比べ 1,711 増加し **4,927** となった。
- 3) WHO のウェブサイトには疾病や健康課題に関する一般市民向けの基本情報として公開されている「ファクトシート」のキーファクト部分について、2014 年 3 月に WHO 本部より付与された翻訳権に基づき日本語版を訳出し、改訂の都度見直して WEB 上で公開した。本年度は、**88** 件の見直し・追加を行った。
また、近い将来の全文翻訳を企図し、オンライン自動翻訳 T400（ロゼッタ）を導入し翻訳作業を行った。
- 4) Web サイトの閲覧状況（PV 数）は急増し、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、4 月には 18 万 PV を超え、その後は漸減したものの、HP リニューアルや毎日の更新の効果もあって平均 10 万 PV という高レベルで推移した。

② フォーラムの開催

新型コロナウイルス感染症の影響で、感染症フォーラムやオーラルヘルスセミナーは中止とし、他のイベントもオンライン開催とした。

1) 2020年9月27日(日) 日本国際保健医療学会学生部会 (jaih-s) との共同企画

セミナー『感染症と共に生きる時代の Social Design & Life Design』

(zoom+google slide、参加者数：140名、) (大阪薬業クラブ助成事業)

以下の講演の後、google slide を用いてワークショップを開催した。

- ・「人間と感染症の歴史について」

講師：山本太郎氏 (長崎大学熱帯学研究所環境医学部門国際保健分野教授)

- ・「新型コロナと医療現場について」

講師：齋藤浩輝氏 (聖マリアンナ医科大学横浜西部病院講師)

- ・「ウェルビーイングやソーシャルデザイン、ライフデザインについて」

講師：杉下智彦氏 (東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座教授)

③ 機関誌の発行

機関誌「目で見える WHO」を4回発行し、会員やイベント参加者等関係先への配布のほか、国立国会図書館をはじめ自治体図書館等へ送付すると共にウェブサイトでも公開した(ウェブサイトには6か月後に公開)。

- ・編集委員会を開催し、年間計画の策定および台割ごとに担当を決め執筆依頼から校了までを行い、入稿原稿は2人の学生サポーターの支援を受けた。
- ・掲載記事は概ね以下の構成とした。

役員挨拶、巻頭特集、セミナー・イベント報告、NGO・団体報告、WHO 協力センター寄稿、WHO 職員日記、直近3ヶ月のWHO ニュース、関西グローバルヘルスの集い報告

④ ワン・ワールド・フェスティバルへの出展 (2021年2月1-21日)

オンライン開催となった西日本最大の国際協力・交流のお祭り「ワン・ワールド・フェスティバル」に下記の動画を出演した。

1) 日本 WHO 協会の社会的役割：市民や企業と共に

中村理事長と生駒副理事長の対談形式 (10分間)

2) 関西グローバルヘルス (KGH) の集い

KGH の運営委員による対談と、実際のオンラインセミナーの動画 (28分間)

なお、これらの動画は、「ワン・ワールド・フェスティバル」の特設サイトで約1年間掲載されると共に、当協会の Web サイトにも掲載した。

⑤ その他啓発事業

事務局に対しては日常的にメールや電話による WHO 関連情報に関する問い合わせがあり、当協会の立場を明確にしつつ回答の対応を行った。

問合せ件数は概ね以下の通り。

- ・新型コロナウイルス感染症関連；約1,000件
- ・新型コロナウイルス感染症以外のもの：約150件

また、WHO の職員を騙る詐欺事案（問合せ累計 32 件）の未然防止を図るため HP に警告バナーを掲載した。

2. 研究事業

（健康に関する調査研究の受託・斡旋・委託及び助成並びに研究成果に基づく提言等の研究事業）

① ラオス小児外科卒後研修プログラムの確立

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際医療協力局（NCGM）からの令和 2 年度医療技術等国際展開推進事業に公募し、採択され、2020 年 7 月 8 日から 2021 年 2 月 12 日までの間、以下の事業を行った。なお、パンデミックの影響で渡航できず、オンラインでの遠隔支援に切り替えて実施した。

□ プロジェクトリーダー：窪田昭男（正会員、月山チャイルドケアクリニック名誉院長）

□ 日本側の参加機関：大阪大学医学部、兵庫医科大学、近畿大学奈良病院、福山医療センター、大阪母子医療センター、月山チャイルドクリニック

□ ラオス側の参加機関： University of Health Sciences, National Children Hospital

- ・ オンラインセミナー（14 単位）
- ・ 症例検討会（4 回）
- ・ 第 1 回小児外科国際シンポジウム in Lao PDR

また、ラオス人医師が対応困難な症例については、Whatsapp を使用した遠隔コンサルテーション支援を行った。

3. 連携事業

（国内外で健康に関する社会貢献活動を行う企業、団体並びに個人との連絡・調整・協力等の連携事業）

① 医療従事者応援はがきプロジェクト

（一社）生産技術振興協会との共催で、新型コロナウイルスと闘う医療従事者とその家族を応援するために、小学生、中学生、高校生（高校生は次年度に継続）から感謝の気持ちを伝えるメッセージやイラストを募集し、大阪府内の主要感染症指定医療機関に贈った。本プロジェクトは、大阪府医師会、大阪府歯科医師会、大阪府薬剤師会、大阪府看護協会の後援のもとで実施した。活動の詳細はウェブサイトで公開した。

② 看護師・助産師・保健師を応援しよう（3 回シリーズで機関誌に掲載）

2020 年の世界保健デーのテーマ「看護師・助産師を支援しよう！」にちなみ、大阪府看護協会と協働し、日本国内外を問わず第一線で働く方々やこれから看護職を目指す学生の“声”を機関誌「目で見る WHO」に掲載した。

③ 以下について後援名義使用を許諾し、事業に協力した。

- ・ 佐久総合病院若手医療者のための Web 講演会
- ・ ワン・ワールド・フェスティバル
- ・ グローバルヘルス合同大会 2020

- ・国際連合公用語英語検定試験及び同ジュニアテスト 2021 年度(日本国際連合協会)
 - ・学生向け就活セミナー「国際機関で働くためにはどうすればいいの？」(大阪大学人間科学部)
 - ・日本国際保健医療学会第 39 回西日本地方会
 - ・2021 世界結核デーセミナーThe Clock is Ticking(ストップ結核パートナーシップ)
 - ・第 21 回模擬国連会議関西大会
- ④ **大阪教育大学 WWL** (ワールド・ワイド・ラーニング) 事業の国内協働機関として参画を決定し、中村理事長が運営委員として参加した。
- ⑤ 2020 年 10 月 31 日 (土) (オンライン開催) AIMaP 数学関連 3 学会連携企画「感染症に立ち向かう数理科学」の特別公開セッション・プログラムの第 1 部。中村安秀理事長と生駒京子副理事長 (大阪大学数理・データ科学教育研究センター招へい教授) が登壇した、国際的な動向に関するインタビュー動画「WHO における数理科学の活用例」が放映された。
- ⑥ その他、中村理事長が対応した主なものは以下の通り。
- ・朝日小学生新聞(2020.5.13)「新型コロナ対策進める WHO」
 - ・桜美林大学「エコロジー・デザイン特殊講義」
 - ・日本看護協会の国際交流に関するヒアリング
 - ・佐久総合病院若手医療者 Web 講演会
 - ・グローバルヘルス合同大会
- ⑦ 関西グローバルヘルスの集い運営委員が、JICHA (国際小児保健学会) 学術大会のオンライン開催を支援した。
- ⑧ **他団体への寄付**
- 寄付目的が当協会の事業と異なる寄付であって寄付者名が不明なものについては、当該活動を行っている他団体へ当協会から寄付をした。
- ・エボラ対策 (¥99,900) →シェア＝国際保健協力市民の会
 - ・COVID-19 連帯対応基金 (¥5,000) →日本国際交流センター「WHO のための新型コロナウイルス感染症連帯基金」国内募金事務局
 - ・きれいな水を飲めない人達のために (¥149,560) →ペシヤワール会
- ⑨ **(一社) 大阪薬業クラブ助成事業**
- 2021 年秋に開催予定の jaih-s との共催フォーラムに関する助成申請が採択され、40 万円の交付を受けた。

4. 支援事業

(WHO の事業目的達成に寄与するための募金活動及び募金収益の拠出並びに活動協力等の支援事業)

エイズ撲滅を進める目的で本会のフォーラム等の機会を活用して募金活動を継続実施し、集まった¥8,194 を (公財) エイズ予防財団へ寄付をした。

5. 人材開発事業

(国内外の健康の向上につながる人材の育成・援助等の人材開発事業)

- ① 日本から WHO をはじめ国際保健衛生分野で活躍する人材を増やす人的貢献の推進をかかげ、国際保健医療学会学生部会とともにフォーラム「感染症と共に生きる時代の Social Design & Life Design」を開催した。
- ② WHO インターンシップについては、新型コロナウイルス感染症の影響で募集が中断しており、支援対象者はなかった。
- ③ 関西グローバルヘルスの集い

グローバルヘルスに関する諸問題について、あらゆる角度から自由闊達に議論ができる場の提供を目的として隔月開催した。企画から実施までは委員会を組織し、運営を行った。感染防止のためすべてオンライン (zoom+YouTube) 開催とした。

◇テーマ；新型コロナウイルス(COVID-19)と持続可能な開発目標(SDGs)

～世界の景色が一変したなかで明日への持続可能性の道を探る～(3回シリーズ)

- ・第8回「すべての人に健康と福祉を！」(2020年5月13日、参加者 743名)

話題提供；COVID-19 感染症の正体とは？

白野倫徳氏 (大阪市立総合医療センター、感染症内科)

COVID-19 が持続可能な開発目標 SDGs の大転換を迫る

中村安秀氏 (当協会理事長)

- ・第9回「だれひとりとり残されない！」(2020年6月3日、参加者 664名)

話題提供；だれひとりとり残されない！ SDGs の理念はいまどこに？

安田直史氏 (当協会理事)

日本で暮らす外国人のいま

小島祥美氏 (愛知淑徳大学)

シンガポールの外国人労働者

林啓一氏 (ラッフルズ・ジャパニーズ・クリニック)

イギリスの新型コロナ対策

松村成一氏 (ロンドン医療センター)

厳格な抑え込みに成功した香港

伊原鉄二郎氏 (ロンドン医療センター、香港)

- ・第10回「持続可能な共生をめざして！」(2020年7月1日、参加者 722名)

話題提供；COVID-19 と三大感染症の挟間で－国際機関の連携・協力

國井修氏 (グローバル・ファンド、戦略・投資・効果局長)

アジア太平洋地域における COVID-19

芝田おぐさ氏 (WHO 西太平洋地域事務局)

NGO のフィールドから見た COVID-19

仲佐保氏 (シェア＝国際保健協力市民の会 共同代表)

◇テーマ；ポスト・コロナ時代の保健医療(Healthcare in the Post Corona Era)

(3回シリーズ)

- ・第11回「生活と仕事に最も近い場での医療・プライマリヘルスケア(PHC)」

(2020年9月16日、参加者 320名)

話題提供；ポスト・コロナにおけるプライマリヘルスケア(PHC)の再評価

中村安秀氏（当協会理事長）

感染症対策とプライマリヘルスケア（PHC）

スマナ・バルア氏（星槎大学卓越教授、元 WHO-SEARO ハンセン
病対策官）

- ・第12回「医療にアクセスしたい：ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の重要性と必要性」（2020年10月14日、参加者 319名）

話題提供；COVID-19を経て考える UHC の重要性

杉下智彦氏（東京女子医科大学教授）

インドネシアの小さな島での医療アクセス

柳澤沙也子氏（甲南女子大学）

- ・第13回「健康ってなあに？：ヘルスとウェルビーイングの原点を探る」

（2020年11月11日、参加者 350名）

話題提供；等身大の（わたし）からみたヘルスとウェルビーイング

熊谷晋一朗氏（東京大学先端科学技術研究センター准教授）

医療人類学からみたヘルスとウェルビーイング

池田光穂氏（大阪大学 CO デザインセンター教授）

- ◇グローバル・カフェ 2020 冬（2020年12月20日、zoom、参加者 21名）

《テーマとカフェマスター》

- ・感染症と差別・偏見 安田直史氏（当協会理事）
- ・アジアの高齢化 柳澤沙也子氏（甲南女子大学）
- ・ヘルスとウェルビーイングのこれから 森本早紀氏
- ・10年後の日本社会とグローバルヘルスを考える 佐伯壮一朗氏（大阪大学）

II 総会、理事会等

1. 2020年6月16日、**定時社員総会**を開催し、2019年度の事業報告、収支決算報告の議案を承認し、理事14名（重任13，新任1）と監事2名（重任2）の選任を承認した。
定款変更（第38条に業務執行会議を常任理事会に変更する等）を承認した。
また、2020年度の事業計画及び収支予算書について報告した。
2. 2020年8月8日、**臨時社員総会**を開催し、乾英夫氏の理事選任を承認した。
3. 2020年度**理事会**を6回（うち、電磁的理事会1回）開催し、法人の業務遂行に必要な決議等を行った。

事業報告及び決算については定款第 46 条に基づき監事の監査を受けた後、2020 年 5 月 14 日開催の理事会で承認した。

2021 年度の事業計画と収支予算は、2021 年 2 月 25 日理事会で承認した。

4. 常任理事会を 9 回開催し、その協議内容については都度、理事会で報告をした
5. 以下の規程を新たに制定した。
 - ・資産管理運用規程
 - ・海外出張旅費規程
 - ・編集規程
6. WHO 西太平洋地域事務局（WPRO）との持続的な関係構築のための協議
英文翻訳した関連資料（役員名簿、活動概要、倫理規程、広告ガイドライン、財務諸表、事業計画、事業報告）を 4 月に WPRO へ郵送した。
2021 年 10 月、姫路市で開催予定の WPRO 地域委員会について、当協会から支援表明を行った。
7. 東京サラヤ株式会社から 1 億円の寄付があり、「サラヤだれひとり基金」として、新たに制定した資産運用管理規程に基づいて資金運用を行うこととした。
8. 持続化給付金および家賃支援給付金を申請し、合計 318 万 8 千円の給付を受けた、

9. 会員の現況

本年度末現在の会員数及び前年度との増減は以下の通りである。

会員種別	正会員 (個人)	正会員 (法人)	賛助会員 (個人)	賛助会員 (学生)	賛助会員 (法人)
2019 年度末	38	18	232	6	50
(退会)	5	1	52	3	6
(入会)	7	1	41	6	1
【増減】	+2	±0	△11	+3	△5
2020 年度末	40	18	221	9	45